

本稿は八丈ビジターセンター平成10年度環境教育活動報告書「hachijoenseis vol.1」からの転載です。写真等の図版の一部を削除しました。

## 特集：学校とのパートナーシップ

古瀬浩史

### 要 約

- ・公園地域内の人向け、若い層向けの教育機会として学校と協力して行う行事は重要。
- ・八丈ビジターセンターでは学校のカリキュラム内の授業に協力する形で小学校や高校にプログラムを提供している。
- ・学校とのパートナーシップをより有効に機能させていくためには、相互理解や、継続していくためのシステム作り、人数（参加者数、スタッフ人数）の問題などを解決する必要がある。

### はじめに

「地域性」を敷く日本の国立公園では、観光等での来訪者だけでなく、公園内や隣接地域に居住する人たちへ情報発信し、地域の自然や自然公園行政に理解を得ることが重要である。一方、ビジターセンターなど自然公園施設の一般的な傾向として、受験勉強や余暇活動に多忙な中学生から二十歳ぐらいまでの年齢層の行事への参加が少ないことが以前より指摘されてきた（古瀬1990など）。八丈ビジターセンターにおいてもこの傾向は感じられる。

この2点（地域向け／若者層）の観点での教育機会を増やすための方策の一つとして、学校の行う教育活動に自然公園施設が協力するという手法が有効であると考えられる。学校教育においても自然体験学習や環境教育の促進が重要視されるようになっており、教科編成などへも反映されている（阿部1993）。現場の教員の立場でも自然体験を伴う野外活動（遠足やキャンプなど）において、野外教育や環境教育を専門とする自然公園施設の協力が得られれば有益であるに違いない。さらには理科や社会科等の通常カリキュラム内でも、環境教育的な分野において、学校と自然公園施設が協力して活動する余地があるのではないだろうか。

学校の団体利用への対応は、これまでも各拠点で行われてきたが、まだ不十分な点があるように思われる。学校の依頼を受けてそれに答えるという消極的な対応にとどまらず、積極的に両者のパートナーシップをつくっていく必要がある。ここでは、八丈ビジターセンターの取り組みを報告するとともに、学校と協力して行う活動の問題点や可能性について考えてみたい。また参考としてアメリカ国立公園局のハワイ島での事例を紹介する。

### 学校と自然公園施設が協力して行う活動を妨げている要因

八丈島の事例を述べる前に、まず学校と自然公園施設が協力して行う活動を妨げている要因を整理しておきたい。

### 1.相互理解が足りない

学校のカリキュラムや教員が求めているものに対してのビジターセンター側の理解が不十分であるし、学校側もビジターセンターの役割や専門性についての理解に乏しい現状がある。「自然に詳しい人がいる」という認識はされていても「自然解説や環境教育を専門とするスタッフがいて、各種プログラムを実施できる」という認識は持たれていない場合が多いと思われる。実際、よいパートナーシップで活動できるケースは、担当の教員がプライベートや下見などで実際にビジターセンターのプログラムに参加され、ビジターセンターの活動を体験的に理解していただいた場合に限られている。

### 2.多人数での利用に対応できない

日本の学校、特に公立の学校では野外行事などの際、学年単位で活動することが多い。生徒数が減少傾向にあるとはいえ、100人を越すことは普通である。そのような大きな人数では、実施できる活動が限られてしまう。レクチャールームでも1回で収容できる人数は100人以下の施設が多いし(表1)、野外解説はもっと難しい。野外で自然体験をともなうプログラムを行うには20人から30人ぐらいまでの人数を、2人以上のスタッフで対応することが理想である。大人数の場合はセルフガイドのワークシートなどを利用することになる。団体の人数の大きさは同時に対応する側のスタッフ人数の問題でもある。

表1.東京都のビジターセンターのレクチャールーム収容人数

ビジターセンター名	収容人数(席数)
八丈ビジターセンター	約70
奥多摩ビジターセンター	約60
山のふるさと村ビジターセンター	約35
高尾ビジターセンター	約80
御岳ビジターセンター	約100
小峰ビジターセンター	約40
小笠原ビジターセンター	約50

### 3.パートナーシップで活動をするシステムがない

学校対応の行事がうまく行われるケースは、担当者の先生とビジターセンター職員との個人的な信頼関係に基づいて行われていることが多いように思われる。しかしそのような場合は担当者の移動などによって長く継続されないことが予想される。強固なパートナーシップを確立していくためには、個人間だけでなく、施設間、組織間で継続して協力しあえるようなシステムが必要であると思われる。

### 4.距離の問題

遠い場所にあるビジターセンターを学校が利用できるのは、遠足などのような特別な学校行事に限られる。通常の授業で気軽に訪れるというわけには行かない。学校が近くにある場合でも、歩いてすぐいける距離でもないかぎりなかなか利用してもらえない。

学校とのよいパートナーシップをつくっていくためには以上のような要因を解決していく必要がある。

## 八丈ビジターセンターにおける学校とのパートナーシップ

八丈ビジターセンターの利用の特徴の一つは、地域住民の利用が多いことである。例えば単発の1日型の行事では参加者のほぼ全員が島内在住者である。顔見知りの人が連日来館するというケースもある。これには島しょであ

るといふ地理的な条件も少なからず影響していると思われる。八丈ビジターセンターは観光地のビジターセンターであると同時に地域の社会教育の施設としての役割も担っていると言える。地域との結びつきが強いということは学校対応のプログラムの実施では好都合な面がある。比較的ビジターセンターから近い範囲にいくつかの学校があり、利用されやすい。また先生とビジターセンター職員のコミュニケーションがはかりやすく信頼関係を築きやすい。また生徒数が少ないことも対応しやすい要因の一つである。このような状況を生かして、八丈ビジターセンターではこれまで環境教育業務の柱の一つとして学校対応を位置づけてきた。今までのおおまかな経緯と、1997年の事例より都立八丈高校の郷土文化実習へのプログラム提供について報告したい。

#### 「植物公園・野外教室」

八丈ビジターセンターでの学校対応の積極的な取り組みは1994年に始められた。1994年に実施した「植物公園・野外教室」は、植物公園内で行う2時間程度の環境学習のプログラムを年間4期にわけて常時設定するもので、各校の都合のいい日（曜日はビジターセンター側で指定）に予約して来てもらえれば、その時期に設定されているプログラムをビジターセンターのスタッフが提供するという方法をとった。ビジターセンターを管轄する東京都八丈支庁から町の教育長を通じ島内の小中学校9校の校長宛に文書で具体的な内容を通知した。比較的レクリエーション要素のある内容のプログラムを広報したため、クラブ活動など課外授業的な時間を利用して利用する学校が多かった。プログラム変更のたびに通知を出したので、学校のビジターセンターに対する認知や利用機会を増やすことには貢献できたと思われる。この年は小中学校から合計15組360人の参加を得た。このプログラムは翌年まで継続したが、その後、時間的余裕がなくなったことや、利用する学校が固定されてしまったことから休止している。

#### 三根小学校理科へのプログラム提供

「植物公園・野外教室」では内容をビジターセンター側があらかじめ設定して広報していたが、もっと強力なパートナーシップを確立したいと考え、学校のカリキュラムに連動した形で授業に協力することを検討した。「植物公園・野外教室」の中で協力関係のできた三根小学校の教職員の方にお手伝いいただきビジターセンターの環境教育業務の範疇で学校カリキュラムのどの部分に協力し得るかを検討し、1996年には小学校4年の理科の授業に協力する形でプログラムを試行した。1997年度には担当の教員は変わったが、引き継ぎをしていただいて、同じく小学校4年の理科に年間4回の継続性のある野外学習のプログラムを提供している。これらの実施に際しては単に依頼されたことをやるだけではなく、担当教員の方と内容についての打ち合わせを何度も行い、カリキュラム上の位置づけを理解した上で内容を計画するように心がけた。また、同校の5年の理科や、三原中学校の野外学習にもプログラム提供を行った。

#### 都立八丈高校「郷土文化実習」

八丈ビジターセンターでは学校対応のもう一つの大きな柱として1996年から、八丈高校における「郷土文化実習」という科目に12時間程度の授業

協力を行っている。「郷土文化実習」を含む「郷土文化」という教科は、八丈高校が独自のカリキュラムとして設定したもので、島の自然や文化の理解、伝統文化、地場産業の後継者を育てることを目的にしており、全体にわたって島内の市民講師が授業を担当する設定になっている。郷土の自然、文化を学ぶという科目の位置づけはビジターセンターの業務の目標と重なるところが多く、協力しやすい。ビジターセンター側からすれば普段接点の少ない地元の高校生にまとまった時間プログラム提供ができるきわめて貴重な機会となっている。これについて内容等を詳しく報告したい。教科の位置づけについて、また学校側の視点での評価を、同教科の設定を担当された八丈高校の伊藤純先生にかいていただいた。また、授業に当たってビジターセンター側が作成したプログラム案を紹介する。



学校側の視点：

## 「郷土文化実習」について

東京都立八丈高等学校 伊藤 純\*

### 1. 八丈高校のカリキュラム

八丈島唯一の高等学校である都立八丈高校は、島内の中学卒業者のほとんどを受け入れている。その結果、生徒の興味・適性・能力・進路は非常に多岐にわたっている。また、島しょという特殊な環境にあるにもかかわらず、身の回りの自然や伝統的な生活文化、地域産業に対する関心が薄く知識も少ない傾向にある。さらに、地域産業や伝統文化の後継者や将来の島を担う人材の育成という面において、あまり力が注がれていない。

そこで本校ではこれらに対応するため、1994年度より新しいカリキュラムを導入し、その中のいくつかの選択講座では指導要領に示された以外の教科・科目を設置している。中でも特に八丈島という地域の特性を生かした教科として「郷土文化」がある。「郷土文化」の中にはさらに「郷土文化実習」「郷土芸術A」「郷土芸術B」「海洋文化」の4つの科目が設置されている。

教科	科目
郷土文化	郷土文化実習 3単位
	郷土芸術A 2単位
	郷土芸術B 2単位
	海洋文化 2単位

「郷土文化実習」……黄八丈の実習を中心に、郷土史、郷土文学、方言、八丈の自然などを学ぶ。

「郷土芸術A」……八丈太鼓・八丈島の民謡について学ぶ。

「郷土芸術B」……八丈焼を中心に陶芸全般について学ぶ。

\*伊藤 純(いとう・じゅん):  
八丈高校理科教諭。新教科  
「郷土文化」の設置に尽力さ  
れた担当者之一人。



「海洋文化」………「スチューパダ化」の実習を中心に八丈島の海洋生物、水産資源について学ぶ。

上にあげた科目ではそれぞれに島内在住の「市民講師」を任用し、授業内容に地域との接点を多く持たせるようにしている。この中でビジターセンターに協力していただいているものは、「郷土文化実習」である。

## 2.郷土文化実習について

「郷土文化実習」の授業目標は次のようになっている。

- ・八丈島に伝わる民話や伝承、文献、方言などを調査・探求することによって、八丈島の歴史や文化の理解を深める。
- ・八丈島の他の地域との歴史的文化的な位置づけを理解させ、現在の島の産業との関わりを考える。
- ・八丈島の代表的な伝統文化、産業である黄八丈の染色、機織の実習を体験することにより、黄八丈への見識を深め、それと関連づけて郷土の歴史、文化の理解を深めさせる。・生物、地形、気象の観察、観測を通して八丈島の自然環境の特殊性を認識させる。

また、具体的な科目の学習内容は、次のようになっている。

- ・郷土史 「八丈島の歴史・八丈島の文化」
- ・郷土方言 「八丈島の方言・八丈島の民話・他の地域との関わり」
- ・黄八丈 「黄八丈の歴史・黄八丈の染色技術の習熟・黄八丈の機織り技術の習熟・産業としての黄八丈」
- ・自然 「八丈島の成り立ち・八丈島の自然環境・八丈島の固有の動植物の観察・自然環境保護」
- ・気象 「気象観測技術・八丈島の気象」

ビジターセンターでは、特にこの中の自然の部分について、6週（計12時間）にわたり、次のような項目で実習を行った。この実習部分は「郷土文化実習」全体の約1/5にあたる。

中略（授業の内容を書いていたが、重複するため省略させていただいた）

生徒たちはこの実習を通して、普段なにげなく見過ごしている身の回りの自然を再認識し、八丈島の自然の特殊性を知ることができた。これは、教室の中では決して教えることができないことであり、特に八丈島の自然に精通したビジターセンターの方々に指導を受けることにより、レベルの高い経験や知識を得ることができた。また、いろいろなフィールドの中で工夫された教材を使い、楽しみながら実習を行うことができたということも大変良かった。現在の高等学校の既存の教科の中で、このような取り組みを行うとすれば「理科」となるであろうが、実際に教員に、その特定の地域の自然に対して深い見聞を求めることは難しく、生徒に与えられる知識も、浅い断片的なものになってしまう。

また、実際に日常、高校生がビジターセンターを利用することは少なく、関

わりも薄い。これを機会に、生徒たちが身の回りの自然に目を向け、ビジターセンターの役割などを知るきっかけとなることとも思う。

生徒だけに限らず、長い期間、島という環境の中で生活していると、その自然があたりまえのものとなってしまう、それらに大きな関心を抱くことが少なくなってしまう。

生徒たちの故郷である八丈島に関心を持たせ、八丈島のこれからを担っていく人材を育成することは、本校にとっても重要なことである。この実習を通して、身の回りの自然があたりまえのものでなく、貴重な存在であることを知り、八丈島の自然のすばらしさを再認識させることができたと考えている。



## 「郷土文化実習・自然」授業準備と実施内容

授業開始前にカリキュラムの検討および授業内容、日程等の確認のための打ち合わせを行い、それを受けてビジターセンター側で授業計画（下記）を立案して学校に提示した。また各授業毎に詳細な授業案を立案し授業前に先生に配布、同時に評価用紙を作成し、引率の教員（毎回2～3人が）に評価を依頼した。97年度は、1学期の4月から6月の間に、2時間続きの授業を計6回（合計12時間）実施した。生徒は3年生14名で、島内で就職予定で進学しない生徒が中心であった。

授業内容（計画）は次の通り。

全体テーマ（全体を通しての伝えたいこと）：

- ・よくみると（八丈の）自然はおもしろい

ゴール（目的）：

- ・生徒は、自分たちにとっては身近で見なれた自然に興味深い特殊性を持っていることを知り、八丈の自然に興味を持つ。
- ・生徒は自然を積極的に「観る」ことで、新しいものが見えてくることを体験的に知る。
- ・参加者は自らの体験に基づいて、八丈島の自然についての意見を持つことができる。

テーマ：プログラムを通して伝えたいことがら。メッセージ。

ゴール：目的。プログラムの終了後に導きたい結果

概要：

「よくみると自然は面白い」という全体テーマの中で、八丈の植物、海岸の自然、野鳥、漂着物、島の成り立ちなどの題材を扱い、直接体験を通して郷土の自然について学ぶ機会をつくり、自らの生活の中で郷土の自然と関わりを持っていくことのきっかけとすることをねらいとした。生徒には、この授業では講師が何かを教えて生徒が学ぶという図式ではなく、生徒自身が自ら体験することによって学ぶ、そのための場づくりをビジターセンタースタッフがやるということを最初に伝えた。この授業での唯一のルールとして「参加すること」を提示し、逆に言うと参加しないところでは何も学べないということを伝えた。第1回の授業では、参加性を高めるための活動を設定し、体験的に学ぶことの動機づけを行った。

毎回の授業の最初に教案および評価用紙を引率の先生にお渡しし、評価



をしていただいた。また、生徒自身の意識変化を知るためのアクティビティ(「八丈の自然は...」)を初回と最終回に設け、授業の効果を検討する材料を得た。

## 各回授業計画

### 問題点と展望

1997年の学校と協力しての活動は、全体量は少ないながら、今までより充実した内容で行えたと考えている。学校の先生方にビジターセンタースタッフの専門性を理解していただき、同時にビジターセンターのスタッフが学校

第1回のプログラム中の「TRUCKS」および「カムフラージュ」は、それぞれアメリカの環境教育のプログラムの中に紹介されている活動で、前者は「Project Wild」、後者は「Sharing Nature With Children (邦題：ネイチャーゲーム)」の中に収録されている。

バードウォッチングのコースは「探鳥サファリ (P32参照)」とほぼ同様。

#### 第1回 4/18 「みる」ということを扱ったいくつかの実習

テーマ：よく観ると新たな局面が見えてくる。

ゴール：

- ・生徒は、実習の中で「注意深く観察する」という体験をし、単に「見る、ながめる」との違いを体験的に知る。
- ・一連の授業についての期待感を高め、主体的な参加を得るための下地を造る。

組立：

- ・この授業でのルール
- ・ワークシート「八丈島の自然は...」
- ・実習「TRUCKS」
- ・実習「カムフラージュ」
- ・短い自然観察
- ・感想

備考：

- ・ビジターセンターおよび植物公園にて。
- ・ややゲーム的に楽しく。

#### 第2回 4/25 バードウォッチング

テーマ：

- ・八丈島には天然記念物に指定された希少な鳥が生息している。
- ・バードウォッチングは簡単で面白い。

ゴール：

- ・参加者は八丈島に生息する天然記念物の野鳥を二つ以上知る。
- ・双眼鏡の使い方などバードウォッチングの基本的な技術を身につけ、バードウォッチングに興味を持つ。
- ・野鳥を通じて「八丈ならではの」自然があることを認識する。

組立：

- ・スライド上映
- ・野外でバードウォッチング
- ・まとめ



第3回 5/9 ビーチコーミング

テーマ：

- ・八丈島の海岸は黒潮によって遠く離れた海とつながっている。
- ・漂着物から海の広がりを知ることができる。

ゴール：

- ・参加者は海岸に黒潮によって遠くから運ばれてきた自然物や人工物があることを知る。
- ・参加者は八丈島の海辺が黒潮に大きな影響を受けていることを知る。
- ・漂着物に興味を持つとともに、ビーチコーミングという自然の楽しみ方があることを知る

組立：

- ・スライド上映（ビーチコーミングへの動機付け）
- ・海岸でのビーチコーミング（漂着物観察、収集）
- ・まとめ
- ・雨天の場合：漂着物を使ったクラフト

第4回 5/16 植物

テーマ：

- ・八丈島には独特の植物が生育している。
- ・人や生きものは、それらの植物とかがわり合っけてらしている。

ゴール：

- ・参加者は、植物の移入の経路を想像することができる。
- ・植物は様々なめぐみをもたらすことを知り、生きものと植物の関わりの具体的な例を挙げることができる（黄八丈、アシタバ等）
- ・ハチジョウの名のついた植物をあげることができる。

組立：

- ・スライド上映
- ・ワークシートを用いての観察（植物公園内）
- ・室内で植物を使つてのクラフト
- ・まとめ

第5回 5/23 海岸の生きもの

テーマ：

- ・海辺の生物は様々な「かがわり」の中で生活している。

ゴール：

- ・生徒はいくつかの生物について、多種との関係や環境との関わりを知る（餌の取り方、生態、生息場所、人間生活の影響など）
- ・生徒は八丈島の海辺が黒潮に大きな影響を受けていることを知る。

組立：

- ・スライド上映（野外観察への動機付け）
- ・海岸での観察：何種類かの生物を採集して水槽に入れて観察
- ・まとめ

第6回 6/6 公園内の自然を題材に島の自然全体（全6回のまとめ）

テーマ：

- ・すべての生きものは島の外から海を越えてやってきた。
- ・島の自然はデリケートなバランスの上になり立っている。

ゴール：

- ・自分と地域の自然の関わりについて考える機会を持つ。
- ・島の自然の成り立ちのおおまかなイメージを持つ。

組立：

- ・クイズ（火山でできた／すべての生きものは渡ってきた／鳥散布／風散布／移入とその害／先史時代の人を持ち込んだ物／いないことが面白い／セミ／コウモリ）
- ・スライド（自然の利用）
- ・ワークシート「続八丈島の自然は…」記入

のカリキュラムを知るように心がけたことで、学校側のニーズに近づけたのではないだろうか。このような相互理解はパートナーシップを築く上で非常に重要だと感じられた。

しかしいまだ問題点は多い。今年の業務についての問題点をあげておく。

## 1. 特定の学校に限られている

ビジターセンターから遠い地区（例えば坂上地域）は交通の問題から利用してもらい機会が少なかった。また依然として担当者間の個人的な信頼関係の上に成り立っている事が否めない。特にここ2年は教育委員会などを通じた広報を行っておらず、以前からつながりのある一部の学校に限って協力がおこなわれている。ただし現状の勤務体制において、同じような授業協力を他校からもおしなべて要望されたら量的にとても対応できないだろう。その意味でいまの活動はまだ実験的な段階だといえる。本来は「植物公園・野外教室」のように、各校に平等に広報してやるべきであろうし、もっと組織的な連携が作られる必要がある。

## 2. 人手の問題

今年行ったような学校対応のプログラムは1回1回がオーダーメイドであり準備にも時間がかかる。スタッフの少ない平日に行われる場合がほとんどのなので、負担が大きい。ビジターセンターの仕事の中では地味で評価されにくい部分だが、平日にももう少し人数をかけられる体制が望まれる。

学校とのパートナーシップは、ビジターセンターの教育的な役割において非常に重要であり、多くの可能性を持っている。これを充実させていくためにはすでにのべたような問題点を解決していく必要がある。

ここからはビジターセンターの一スタッフとして取り組むことのできる範囲を超えてしまうが、この視点から考えられる展望を考えておきたい。

もっと多くの教育機会を作っていくためには学校とビジターセンターが協力して活動を行うための新しい仕組みが必要だと思われる。例えば地方行政の教育関係の部署に活動の実施を調整する係（コーディネイター）を担当していただき、公的な行事にしていくことは有効であろう。生徒の移動手段についても予算化して解決したい。先生とビジターセンター職員が知り合える機会（ワークショップなど）が定期的に作れるといった取り組みも必要性を感じる。これらの点において参考に示した後述のハワイ島の事例は参考になる。また学校側にはできるだけ少人数（クラス単位）での利用をお願いしたい。

将来的には島内だけでなく、都内全域の学校に八丈島での環境学習を促したい。そのためには、ビジターセンターが直接提供するプログラムの充実だけでなく、学校が自主的に八丈島で行う環境学習を支援するための教材やプログラムの開発、案内資料の作成といった仕組みづくりが必要であろう。八丈島で行うことのできる環境学習の題材の紹介や教材等をまとめたカリキュラムガイドを作成し都内の学校などに配布してはどうだろうか。もし学校単位で来島し、当地を環境学習の場として利用してもらえば観光産業的な側面でも島に貢献できると思われる。

もっとふるしきをひろげるならば、東京都のビジターセンター全体を学校等の環境学習の場として機能させることはできないだろうか。アメリカやオーストラリアなど海外の自然公園を視察する度に、学校とのパートナー

シップにおいて実施する教育活動を重視している傾向を強く感じる。学校等の団体が環境学習に取り組もうとするときに、各ビジターセンターの地域性にあった豊富なメニューの中から、目的にあったものを選択してサポートが得られるようになったら、自然公園やビジターセンターの存在意義は今以上に高まっていくだろう。

ビジターセンターの機能が学校関係者などにまだあまり理解されていない現状は、システムの問題とは別に解説業務にあたる職員の努力不足もあるだろう。学校と協力して行う行事の中では、教育の専門家である教職員の方の眼にさらされた中でプログラムを行う事になる。このような機会に最善を尽くすことによって少しずつ学校の信頼を得ていくことができるであろうし、また同時に解説員の資質を向上させるよい機会となると考えている。「自然に詳しい人がいる」という点で期待されるだけでなく、環境教育やインタープリテーション技術といった解説員の本来の資質の点で評価を得ていきたい。

## 参 考

### 「ハワイ島ボルケイノ国立公園」における学校と自然公園施設とのパートナーシップ事例

1997年2月に、インタープリテーション研究会とアメリカ国立公園局が共催する環境教育に関するセミナーがハワイ島で行われ、その中で国立公園局と地域の学校とのパートナーシップで行われているプログラムを視察する機会を得た。以下にその際に得られたいくつかの情報を紹介する。

学校が国立公園内で行う教育活動を支援する施設、教材等が整備されている

ボルケイノ国立公園は島しょにある国立公園ということから、アメリカの他の国立公園と異なり、公園に比較的近い位置にいくつかの学校等がある。その意味で地域社会との結びつきも深い印象を受けた。

国立公園内の施設地区内に「環境教育センター」と呼ばれる建物（木造の小規模なもの）があり、学校等の団体を受け入れる役目を果たしている。そこには、レクチャーのできる部屋や小規模な展示があり、レンジャーが常駐している。

国立公園の自然や文化、歴史等について学ぶためのカリキュラム（バインダー形式で種々のプログラムが系統だって収められた資料）が整備され、それを使って国立公園を利用して学習することを促すため学校に送られるキットがつくられている。キットは「カリキュラムガイド」と呼ばれ、カリキュラムの紹介や、利用を促す手紙、紹介ビデオなどがセットされている。その他「火山」に内容をしぼった先生向けの指導書が公園関係のNGOによって作成されるなど資料類は非常に充実している。また、国立公園局による先生向けのワークショップの企画や、地域の自然や文化を学ぶことを目的にしたお祭りのイベントが国立公園局によって行われる。

カリキュラムガイドは、視察で訪れたアメリカ公園のほとんどで作られており、現在の国立公園の環境教育において非常に重要な役割を果たしていると考えられる。

学校と国立公園が協力して教育活動を行うためのしくみがある

ハワイ州の教育部門に野外教育を担当するセクション（スタッフは1名）があり、学校が国立公園局と協力して行うプログラムをコーディネートしている。現在中心的に行われているプログラムでは、ハワイ島に住む小学生は

全員6年生になると2泊のキャンプに参加し、ボルケイノ国立公園を訪れる（年間約3000人）。その中で公園内のポイントを訪れてレンジャーからレクチャーを受けるなど、様々な環境学習が行われる。このプログラムでは、食費のみを各自が負担し、その他は州が費用を負担している。

視察では、学校のグループが火山洞窟（ちょうど八丈風穴のような）を見学するところに同行した。40人ぐらいのグループで、楽しそうにプログラムに参加していた。遠足などと異なって学習の目標がはっきりしており、きわめて計画的なプログラムが行われている様子だった。何よりも、学校と公園の信頼関係や役割分担がきちんとできている印象を受けた。

#### 参考文献

- 古瀬浩史．1990．若い世代に魅力的なプログラムとは：清里環境教育フォーラム報告書：83-84
- 阿部 治．1993．生涯教育としての環境教育：子供と環境教育：東海大学出版会：2-16
- インタープリテーション研究会編．1998．海外インタープリター研修会1997報告書